乳児期から幼児期への言語行動の発達について

——前言語的行動を中心に——

松　原　巨　子

The Development of speech acts during the first two years of life

MATSUBARA Hiroko

1. はじめに

1)乳児期から幼児期への移行期について

人間の発達において，ほぼ1歳から1歳半の時期は一つの大きな質的変化をとげる時期である。この時期は，乳児期から幼児期への移行期として捉えられ，直立二足歩行の獲得，言語の獲得，手による道具の使用の開始，の3点によって特徴づけられる。人格発達の視点からみれば，自立の開始期として捉えられよう。すなわち Spitz (1965) がのべたように1歳3ヶ月は“ノー”の始まりの時期であり自我の芽生えと特徴づけられている。この自我は，上記の3点で特徴づけられるような乳児が外界と関わり対象を変革する能力が相互に関連しつつ発達する中で，形成されてゆくと考えられる。

この時期は，言葉をかえれば「危機」の時期とも捉えられる。それは自閉性発達障害をもつ子どもにおいて，この時期に発症が多いこと (Bettelheim 1973)，あるいは言葉の退行がおこりやすい年齢として指摘されていること(西村ら，1978)，また重度精神薄弱児において発達年齢1歳6ヶ月前後でつまずきやすいことの指摘(田中1968)など，この時期の発達課題をのりこえることの困難性を示している。これは障害児に限らず，健常児においても1歳半前後に，依存傾向の増大，他児へのかみつき，目的のないウロウロ歩き，などの問題行動がふえる，といった指摘（近藤1979）がなされている。このように1歳半前後は，発達的変化が急激におこる時期であり，環境やさまざまな条件への感受性が強く，発達的に不安定な時期であるといえよう。

このような「危機」の時期をのりこえ，乳児から幼児への移行をとげてゆく子どもの発達の姿を明らかにし，そのメカニズムを検討することは，すべての乳幼児の健康な発達を保障してゆく上で重要な課題であるといえよう。

本論では，この時期の言葉の発達に焦点をあてて，言語獲得に関する先行研究を整理し，筆者の研究を中心に言語獲得についての仮説的な段階を提示すること，を目的とする。その際に，近年急増している前言語的伝達行動の研究に注目し，言語を準備する条件は何かという点に焦点をしぼりたい。

従来の言語発達研究では言語の形式に研究の焦点がむけられていたが，近年，子どもが使う言語や前言語的行動を，その使われている状況との関連で捉えようとするアプローチがふえている。このアプローチにより，子どもにとっての言語行動の持つ意味を問うことが可能になってきてい

ると思われる。しかし，子どもの発達全体を視野に入れ，その中での言語発達の位置を問う視点に立つ実証的研究はまだまだ少いと思われる。従って，今後の課題としては，上記でのべたような1歳から1歳半の発達の質的転換期における言語獲得の位置づけ，などについても視野に入れつつ研究をすすめてゆくことが大切であるといえる。本論においても十分とは言えないが，上記の視点から論をすすめたい。

2. 言語獲得に関する先行研究の整理

1)前言語的発達について

言語とは何か，その前提を問わんとする実践的アプローチが近年多く試みられ，前言語的発達に関する研究が急増している。

この間，意欲的に一連の研究をすすめている Bates らの研究がまず，あげられよう (Bates, Camaioni & Volterra 1975, Bates, Benigni, Bretherton, Camaioni & Volterra 1977, Bates 1979)。Bates らは，言語発達の認知的前提条件と社会的前提条件を明らかにしようという試みを行っている。Bates ら(1975)は，生後2ヶ月から1歳までの3人の子ども[1]を縦断的に観察する中で，身ぶりなどによる伝達行為(指さし，手さし，さし出し，さし示しなど)がみられるのは Piaget の感覚運動的知能の第5段階であるとし，第6段階になって対象を指示するシンボルとしての語が出現してくる，ということを示した。また Bates ら(1977)は25人の子どもを9ヵ月から12ヵ月の4ヵ月間にわたって月1回の観察及び実験を行っている。そのデータから Bates (1979)は前言語的伝達行為と言語及び Piaget を元にした Uzgiris と Hunt による認知スケール，社会性の尺度，などの相関分析を行っている。そこで彼女は，伝達的みぶりの中でも特に伝達的指さしと言語との相関が高いこと，いくつかの限られた認知尺度が伝達行為の発達とある時期に限って相関が高いこと(例えば手段―目的関係の尺度では9ヵ月で相関がある)，などを示した。これらのことは，前言語的発達の段階における伝達行為の形成にとっての，感覚運動的要素の重要性を指摘していると思われる。

Bates らの詳細なデータは，言語獲得にとっての伝達的みぶりのもつ意義を明らかにしている点で大きく評価されよう。しかし，彼女らがかかげる言語と認知の関係についての仮説[2] (local-homology model) を実証してゆく上ではまだまだ問題点が残されている。まず第1に，言語と認知が彼女らのいうように一様に平行の関係ではなく何らかの関係をもちつつ発達の段階毎に関係の様相をかえてゆくものである，とするならば，その両者を結ぶものは何か，両者の発達をおしすすめ関係のあり様をかえる原動力たるものは何か，という根底的な問いが残されるであろう。第2には，方法の上で，言語や認知の指標をどう捉えるのかという点があげられる。彼女らの研究において，社会性の指標として Ainsworth の愛着行動の尺度が用いられたが，認知や言語との関係を知る上で十分な結果が得られていない，ということにもみられるように，何を尺度として用いるかにより結果が左右されることは十分ありうる問題である。今後，理論的にも実践的にも深めてゆくべき点であるといえよう。

次に，母―子相互作用の分析から，前言語的発達の重要性を指摘した Bruner の論に注目してみよう。彼は，前言語的伝達活動の中にすでに，文法的な言語の構造が含まれているとするみかたをとる。すなわち，母と子が物をやりとりするといった前言語的段階の母―子相互作用の中に

すでに「行為者 (agent)—行為 (action)—対象 (object)—受け手 (recipient)」という言語と共通の関係が顕現されており，この関係の学習を通じて子どもは言語の構造を学習することができる，とするものである (Bruner 1976)。Bruner らのグループによる一連の研究では，上記の過程について実際の母—子相互作用を分析して，次のような発達をとげることを明らかにしている (Bruner, 1975, 1976a, 1977, 1978, Bruner & Sherwood 1975, Ratner & Bruner 1978)。

まず，母親が一連の行為(例：イナイナイバーあそびや物のやりとり)をリードして開始し，子どもは母親の行っていることに対して母親と共通の注意 (連帯注意；joint-attention) をむける。そして母親の行為に子どもも加わろうとする段階に達すると，子どもにとって行為そのものが遊びの中で重きを占め，母親と共通の行為 (連帯行為；joint-action) を開始する。この過程で母親の行為に伴った言葉かけ(例：「バー」といって顔を出す，「どうぞ」といって物をさし出す)が，母親の意図を子どもに伝える際に有効となってくる。さらに子どもが遊びのイニシアティブをとった段階に至ると，今度は逆に子どもの方からの発声が行為に伴いだし，子どもの意図の伝達に役立つようになってくる。以上の過程の中で，連帯注意と連帯行為の形成が，前言語から言語への移行にとって重要であるとする指摘は大変興味深い。

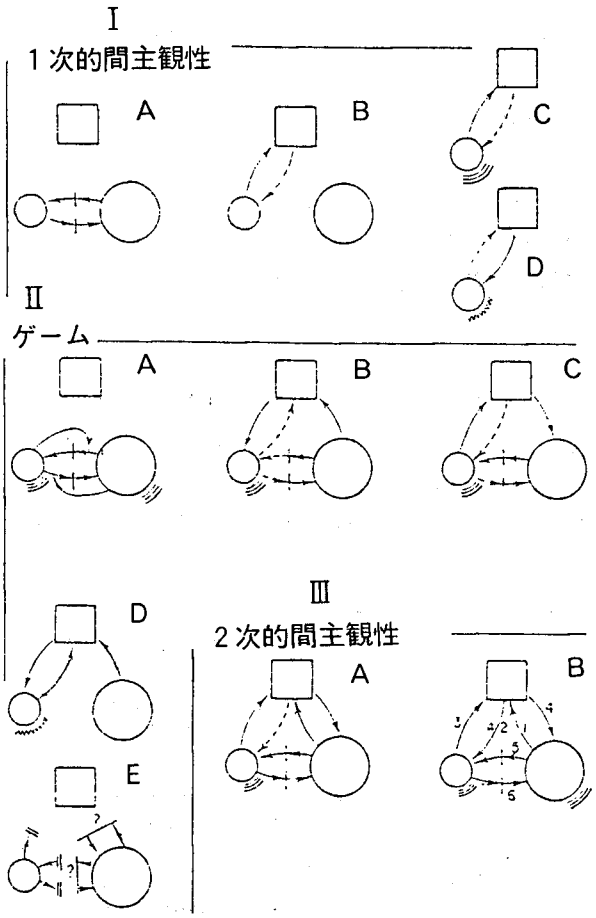
言語獲得を問題にする際に，単にどのような行為や音声が出ているか，という分析のみならず，その行為や音声がどんな状況のもとで使用されているかという視点，いいかえればコミュニケーションの質を問題にする視点は，従来欠けていたように思われる。この点で Bruner らの指摘は，前言語期における母と子の関係そのものを分析した知見として重要な指摘と思われる。しかし，彼の指摘のみでは，前言語から言語への移行自体の分析が不十分であるように思われる。前言語的伝達様式の構造が，言語と共通のものであるとしても，言語に移行する必然性は生じてこない。言語独自のコミュニケーションの質についても考慮する必要があろう。

以上にあげた Bates や Bruner の研究は，村田(1981)によると，実用論的アプローチとして近年着目されている。前言語的伝達行為の中に次の言語を準備するものをよみとりまた実際に使われている場面に着目したこのような研究の方向は，言語獲得に障害をもつ子どもにおいて，その原因や指導のあり方を解明してゆく際に，特に有用と思われる。

次に，コミュニケーションの発達という視点から前言語期の行動に着目した研究をみてみよう。Bullowa は，コミュニケーションの発達という共通する問題意識をもつ研究者による16本の研究を編集し，そのイントロダクションとして次のようにのべている (Bullowa 1979)。すなわち，言語の開始をもってコミュニケーションのはじまりとみなす考えにより人間の早期からのコミュニケーションについての研究がすすまなかったとし，言語以外の指標として，表情，みぶり，体の向き，発声などのトータルな複合的様相で，コミュニケーションを研究する必要がある，とするものである。一例として要求行動の発達をあげ，そこでは，注視→手さし→指さし→発声の順[3]に対象を特定する行動が生じる，とのべている。この指摘は大変重要であると思われるが，言語の起源をともすると，はてしなく逆のぼらせて新生児期からのコミュニケーションの質を問うことによって検討するという形になりかねない，という問題がある。言語の獲得を考える際に，どの段階からのコミュニケーションを特に問題としてゆけば良いのか，この点については今後の検討課題であるといえよう。

この点で，Trevarthen らの研究は興味深い。彼らは，乳児期初期からのコミュニケーション

の発達を，間主観性（intersubjectivity）の機能の発達という視点から分析している（Trevarthen, 1977, 1979, Trevarthen & Hubley 1978)。そこでは，9カ月以降が，母と子の間で物をやりとりする関係にみられるような二次的間主観性の成立として，1つの段階とみなされている（図1参照)。



〔説明〕註

(I A)交流的状況：乳児と母親が顔をみあわせて交流しているが物には注意はむけられていない。

(I B)物との関わり：乳児は行動し，母はみている。

(I C)Piaget のいう同化："マスターすることのよろこび" によるあそび。

(I D)Piagetのいう調節："真剣な意図" による模倣，追跡。

(II A)人一人ゲーム：乳児は母親からの働きかけに対して働きかける。

(II B)物一人ゲームI：母親は乳児を喜ばそうと物を動かし，乳児の顔をみている。

(II C)物一人ゲームII：乳児は物を動かし，母親はそれを追跡する，乳児は母親をみて喜ぶ。

(II D)乳児は，母の与えようという意図には無関係に，さし出された物をうけとる。

(II E)乳児は，母によって与えることを求められる。そして母親をさけて拒否する。

(III A)乳児は，母に物を与え，それがうけ入れられてよろこぶ。

(III B)人一人一物 流暢性の完成：例)母は乳児にどうやってするのかを示す(1+2)乳児はうけ入れる(3+4)そして，乳児は母をみ，二人とも喜ぶ(5+6)

註（訳は筆者による）

図1　Trevarthen & Hubley (1978) による「二次的間主観性の発達における機能」の図式

ここで示された母と子の関係の図式は Bruner の指摘とも共通しており，9カ月前後を一つの画期として言語獲得との関連を検討することは妥当と思われる。また，この頃は，Bates らの研究でも指摘された指さし行動の出現の頃であり，後にのべる伝達的な指さし行動と言語獲得との密接な関連を考慮すると，9カ月前後の何らかのコミュニケーション構造における変化が後の言語獲得につながることが推測される。

指さし行動の発達については Murphy らが母一子相互作用の中で分析している（Murphy & Messer 1977, Murphy 1978)。そこでは，9カ月で乳児の自発的な指さしがみられ，20カ月で指さしと発声の併用がピークとなり，24カ月では発声が独立して使用され指さしがへる，と指摘されている。これに類似した結果を大浜ら(1981)の研究が示し，そこで指さしと言語の併用は，

場面依存的性質をもつ言語と指さしが全体として一つの機能を示している，と説明されている。指さしと言語との関係については，さらにくわしく検討してゆく必要があると考えられる。この点については，後に筆者の研究を中心にしてのべてみたい。

以上，前言語期の研究に焦点をあてて言語との関連を検討してきた。これらの研究から次のようなことがいえよう。

①前言語期における，伝達的みぶり(指さし行動，さし出し，さし示し，など)の獲得が後の言語獲得と関連すること。

②前言語期における母一子相互作用の交流の質が重要であること。特に連帯注意，連帯行為の形成を重視すること。

③コミュニケーションの発達において9カ月以降を一つの節として捉え，そこにおける指さしなどみぶりの発達と言語の出現との関係を直接検討することの重要性。

さて，次に言語獲得にとって言語以外の諸機能の発達がどのような意味をもつのかについて焦点をあててみよう。

2)言語と他の機能の発達との関連

言語の発達と運動機能との直接的関係をのべた研究は少い。わずかに岡(1968)が，歩行の開始との関連を検討して，運動機能がのびる時期に言語の増大が抑制されることをのべたにすぎない。このように言語獲得と運動機能の関係はまだまだ明らかにされていないが，運動機能を，目的をもって移動する能力の獲得として捉えなおすと，一定の言語獲得との関連が示唆される余地があるように思われる。例えば，近藤(1979)によると「1才半をすぎると一中略一基点を軸にして逆方向に姿勢をかえたり移動したりして体の向きをコントロールし始める。一中略一コトバと結びついて行動をコントロールすることができてくる。」とのべられており，言葉が獲得されること

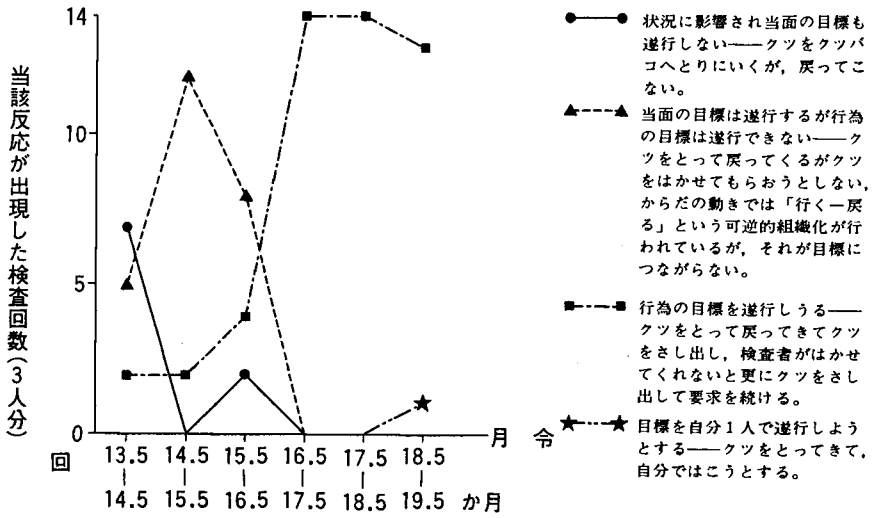


図2 「クツをとってきて」という指示に対する反応の変化註

3人の子どもについて，13.5カ月から19.5カ月まで，毎週1回。散歩へ行く前に指示して，その反応を記録した。1か月に，3人で合計して14回検査を実施した。毎日の日課になっているので，他の行動よりも早く遂行できるようになっている。 註 近藤(1979)より

と行動のコントロールとの一定の関係が示唆されよう(図2参照)。この点については，今後の研究の課題として残されている。

次に，言語発達と手・指の機能との関係について，コリツォーバ(1973)が言葉の遅れた子どもに，手指の細かい操作を行う訓練を行った結果，コントロール群に比して言葉の獲得が顕著であったと報告している。また，大井(1976)によると，1歳半以降に利き手が未確立な子どもに言葉の遅れがみられると報告されている。このようなことから，言葉の発達に問題をもつ子どもにおいて，手指の機能と言語との関連が指摘されるが，健常な発達の中で言語と手指の機能の関係をみた実証的研究は少いと思われる。

しかし，園原(1961)の指摘にもあるように発達を機能連関の視点から捉えることの重要性，また1歳から1歳半という時期の特質を考えると，言語と他の機能との関連については，現在の言語発達研究に欠けている側面として捉え直し，今後の研究の中ですすめてゆく必要があるだろう。

3)言語獲得についての規定

言語の獲得を問題にする際に，議論の対象となる点として，初語をどう規定するか，何をもって言語の獲得とみなすか，という問題がある。

初語に関する研究では，その開始期については，9カ月から1歳半頃までと結果にかなりひらきがみられる。Grieve & Hoogenraad (1979) は，この点について，単に個人差の問題というよりはむしろ，自発語をどうみるのかという見解の違いが影響している，とのべている。最近の見解では，初語とは，大人と同様であると認められるように子どもが発話した時を初語の開始とみなす研究が多いようである (Greenfield & Smith 1976, Nelson 1973)。

筆者は，1歳以前の初語の出現から，1歳半頃の「音声」と「世界」との対応関係に気づき特定の事物を指示する語を獲得するまでを，言語獲得期として捉えたい。田中(1967)によると，この1歳半前後は「はなし言葉の獲得期」として捉えられている。彼は，「はなし言葉」を，他者との間に第三者を介して可逆交通できる語（すなわち，他者から「～どれ？」と問われて指さして答えられ，また「これ何？」に対して言葉で答えられる，という理解と伝達の両側面の機能を果たす語)と捉えている。この「はなし言葉」の規定は，Nelson (1973) が示すところの「指示語 (referential word)」と「表出語 (expressive word)」の区別でいえば，「指示語」に対応するものと思われる。1歳半頃にこれらの語が急増する時期があることについては Okamoto (1962) や中島(1976)によっても示されている。従って，筆者は，この規定に基づいて言語獲得を捉え，以下検討を行うものとする。

3. 言語獲得についての仮説的段階の検討 ——指さし行動を中心に——

言語獲得を考える際には，9カ月頃からの前言語期から1歳半の発達の質的転換期における「はなし言葉」の獲得までは一貫して視野に入れる必要があると考えられる。その際には前述のように，言語のみならず子どもの発達を機能連関の視点からトータルに捉える必要があろう。しかし，本稿ではさしあたり問題を限定して，前言語的行動の一つである指さし行動の発達を中心に言語獲得との関連を検討することとし，全面的な機能連関についての検討は，今後をまちたい。

ここでは，筆者の指さし行動と言語に関するデータをもとに，前述の先行研究から得られた知見を参考にしつつ，約9カ月から1歳半までの前言語的行動から「はなし言葉」獲得までの過程

を概観し，言語獲得の段階について仮説的に提起する。

1) 9カ月[4] から11カ月までの前言語的行動の発達

この時期に指さし行動の初出がみられることが多い。初期の指さしは，松原(1982)の調査によると，自発的であり，驚きや定位の機能をもつことが多く，他者への伝達手段として機能しているわけではないことがわかる（表1参照)。

表1 「初めての指さし」の内容について，100名へのアンケート，上位5位までの結果。

松原(1982)より

順位　　内　容	人　数
1. 視線の上の方向にあるもの(天井，電灯等)	15
2. ぼくぜんとした状況で指さす	7
3. 動物(犬，ネコ，ツバメ等)	6
4. 外の方向をなんとなく指さす	5
5. 親が指さして教えるとまねて指さす	5

このように，乳児の側に伝達意図はなくとも，他者（主として母親などの育児者）の方から乳児の指さしに応じ，共感し，あるいは説明をつける，といった一方的交流が触発されることは十分ありうる。しかし，他者からの言葉かけは，それのみではこの時期の乳児に必ずしも有効に働くわけではない。例えば松原(1980)によると，他者と乳児がコップとつみ木を介在して交流する場面で，他者の「ナイナイして」といった言葉かけのみでは，コップにつみ木を入れるという乳児の行動は触発されにくいのである。ところが，他者がお手本として自らつみ木を入れ「ナイナイして」と言葉をかけると，乳児の行為の遂行率は飛躍的に高まる，ということが示されている(図3参照)。

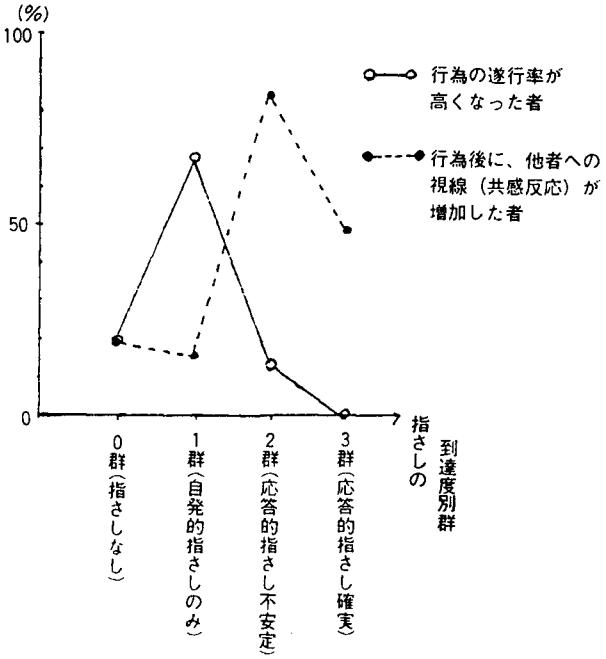


図3 「お手本なし」から「お手本あり」へと他者からの働きかけが変化した時に，乳児の反応が変化した者の割合。　松原(1980)より

このことは，この時期の乳児が他者と交流する際に，他者からの言葉かけのみならず同時に与えられる他者の行為や視線といったあらゆるものをヒントにして状況を理解していることを示している。言語による交流という点でみれば，他者からの一方向的働きかけの段階といえよう。

従って，この時期の乳児に対する働きかけとしては，単に他者からの言葉かけだけに終わるのではなく，乳児と他者との間に物(第三者)を介在させた働きかけと，そこでなされる言葉かけが重要であるといえよう。この点は，Trevarthen の指摘にある「二次的間主観性」の成立の状況とも共通すると思われる(図2参照)。

この時期の母と子の関係をみれば，それまで密着的であり，直接的な情動的交流が中心であっ

たものから，第三者としての物を介在させた交流が開始されることで，母子一体の世界からぬけ出て，母―子―世界という関係に入り，次の記号としての言葉の世界に入る準備がなされている，と思われる。

2)11カ月から1歳前半の発達

a)第1段階；11カ月前後の変化

9カ月から11カ月の期間に十分自発の指さしを行い，またそれに対する他者からの総合的な働きかけをうけた乳児は，11カ月前後で他者からの言語的働きかけを理解し，それに応じた行動ができる，という変化を示すようになる。松原(1980 a)によると，他者からの「～どこ？」という問いに応じる応答的指さしが出現しはじめ，指さしに伝達機能が獲得されてゆくのはこの時期である(表2参照)。

表2　指さし行動の到達度別4群の月齢構成　松原(1980 a)より，アンケート調査の結果。

日齢 / 指さし群	9	10	11	12	13	14	15	合　計
0群	19	12	3	1	2	0	0	37
1群	2	2	6	12	2	4	4	32
2群	1	3	12	2	1	3	3	25
3群	0	1	4	7	9	17	13	51
計	22	18	25	22	14	24	20	145

0群；指さしのみられないもの
1群；自発的な指さしのみがみられるもの
2群；自発的指さしに加えて応答的指さしがみられるが，きかれたことに必ずしも正しく応じられない場合
3群；自発的指さしに加えて，正しく応答的指さしを行うもの

註　応答的指さし不安定群(2群)及び応答的指さし確実群(3群)は，11カ月頃から，出現数がふえてくることがわかる。

その他にも，「ちょうだい」といわれて，自分の持っているものを相手にわたしきれる反応が確立しだすのもこの時期[5]である。また，前述の松原(1980)の研究によると，他者との間に物(コップとつみ木)を介在させた場合に，「ナイナイして」といった言葉だけでコップにつみ木を入れることが十分できるようになる。そして単に機械的に応じるだけではなく，乳児から他者に対して自らの行為を確認し，共感しようとする反応が急増するのもこの時期以降である(図3参照)。この共感性の増大が，乳児の側からのコミュニケーション要求の高まりへと発展してゆくものと思われる。Bruner ののべた，連帯注意と連帯行為の形成の過程が，この段階に相当すると考えられる。彼のいうところの，行為自体が楽しい段階であり，他者に示す共感性も，感覚運動的行為自体のもつ快感に支えられている部分が多いと考えられる。

従って，言語による交流という点でみれば，乳児の側からのコミュニケーションは比較的受動的な形で表われている段階といえよう。

働きかけの留意点としては，乳児の感覚運動的活動の快を保障すること，ということがあげられる。すなわち，第三者(物)の介在を，乳児と他者の間で共感しあえる関係の形成が重要であると思われる。

b)第2段階；1歳から1歳3カ月前後

いわゆる初語らしきものが表われる。もちろんまだその音声のみで十分に通じる内容ではない。多分に情動的色彩をおびた発声であり，指さしなどのみぶりやその場の状況を手がかりにして意味が理解される内容である。

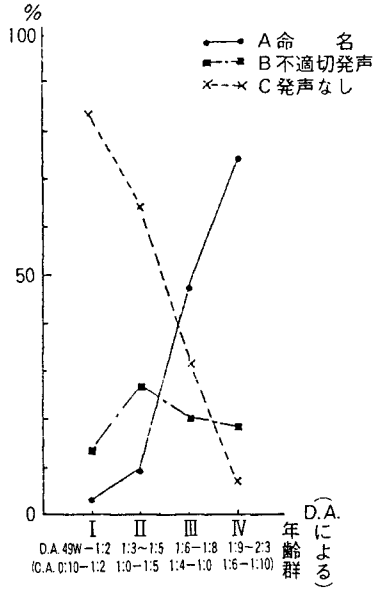


図4　動物の絵をみせて「これ何？」ときいた場合の発声反応の変化　松原(1979)による

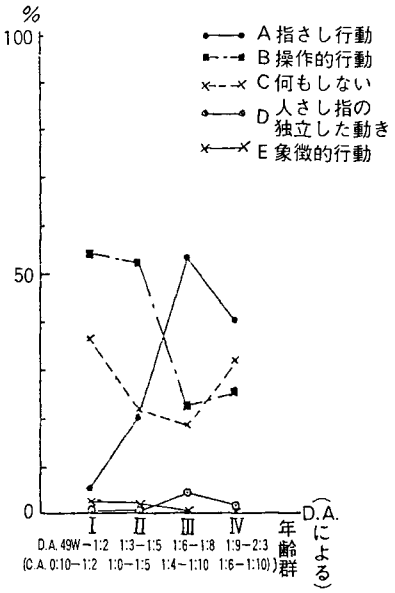


図5　動物の絵をみせて「これ何？」ときいた場合の指さし行動など，手の反応の変化　松原(1979)による

註) D.A. 年齢群 I. II. においては，正しく命名で答えることができず，むしろ，指さし行動や操作的行動(いじる，など)を示すことが多い。

松原(1979)によると，この時期の子どもに動物の絵をかいたカードをみせて「これ何？」ときいた場合，ふだん「ワンワン」と言える子どもでも答えられることは少い。答えようとする構え自体があまりみられない。むしろ指さしなどで応答したりする場合がみられる(図4，5参照)。このことは，この時期の発声の不安定さ，すなわち他者との間で言語として独立してやりとりできるものに至っていない，ということを示しているように思われる。しかし，この時期の乳児の他者との共感関係を基礎とした交流要求の高まりは，指さし，みぶり，あるいは発声という形で他者に応じようとする努力を生むことになる。松原・瓜生(1982)によると，保育所児3名に対して週1回縦断的に，絵をみせて「これ何？」ときくテストと，たくさんの絵の中から「〜はどこ？」

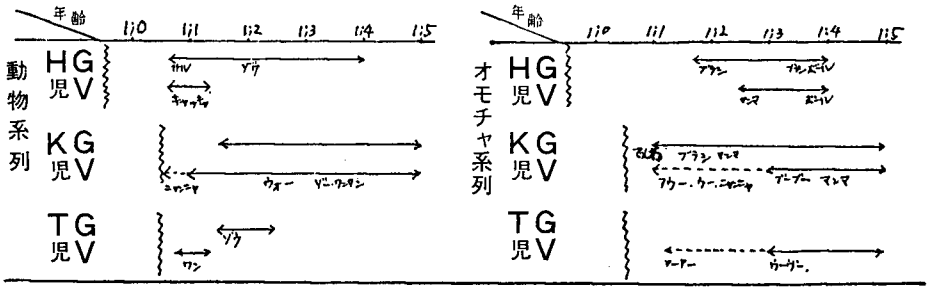


図6　絵カードに対して「これ何？」でみられた。ジェスチャー・発語の出現時期
(3名の乳児に対して，毎週1回テストを行った結果)

註) 1：0〜1：3頃に，ジェスチャーで応ずる反応がみられる

・G：ジェスチャー
・V：発語
・図中の文字は反応を示した図版の種類をさす
・〜は実験開始時点を示す
・←→は不適切な発語の出現
・←→は適切な反応の出現

松原・瓜生 (1982) より

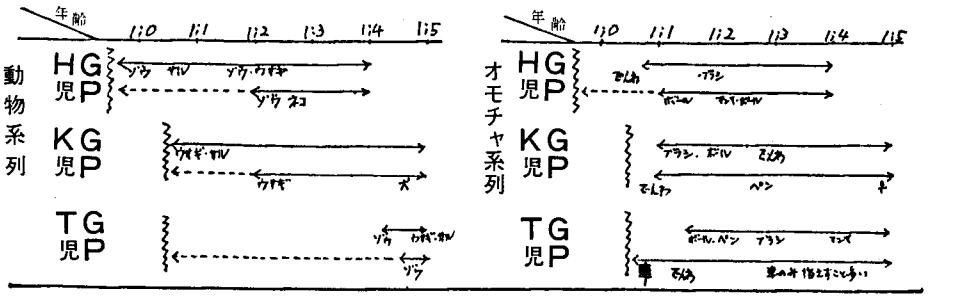


図7　多くの絵の中から「～ドレ」でみられたジェスチャー，指さし行動の出現時期
（3名の乳児に対して毎週1回テストを行った結果）

• G：ジェスチャー
• P：指さし行動
• 図中の文字は反応をみた絵をさす
• }は実験開始時点を示す
• ←--→は不適切な指さしの出現
• ←—→は適切な反応の出現

松原・瓜生（1982）より

註）1：0～1：3頃。ジェスチャーで応ずる反応が出現している。

ときくテスト，さらに絵本等で自由に遊ぶ場面を構成して研究を行った。そこでは，テスト場面で各々の問いに正しく言葉で，あるいは指さして正確に，応じえない場合に，みぶり[6]を用いて反応することが示されている(図6，7参照)。これらのみぶりの使用は，日常の保育場面で保育者と乳児が交流する際によく用いられるものである，という点を考慮すると，乳児の対他者交流要求のあらわれと考えられる。言葉や指さしで応ずる態度が形成されていない場合でも，交流手段をもつことが重要なのではないだろうか。

以上のことから，この段階の乳児は，他者との間で言葉を用いて第三者を成立することは不可能であるが，指さし，あるいはみぶりなどの，対他者交流要求実現の手段をもつことで，まさに第三者が，成立されんとしている段階にあると考えられよう。

c)第3段階；1歳3カ月から1歳半前後

この段階では，絵カードで「これ何？」ときかれた時の指さしの反応が増加してゆく。そして1歳6カ月近くなると，指さしに命名的発声をともなわす反応がピークになる(図8参照)。この時の発声は，動物ならすべて「ワンワン」で代表するというような般化のみられる時期でもある。松原(1979)の研究よりみると，1人の男児(K児)を週1回縦断的に観察しテストを行った結果，C.A.1歳3カ月から1歳5カ月までは，「これ何？」という問いに指さしと般化による命名発声の両方で応ずるということが示されている(表3参照)。

この段階は，未分化な音声しかもちえない乳児

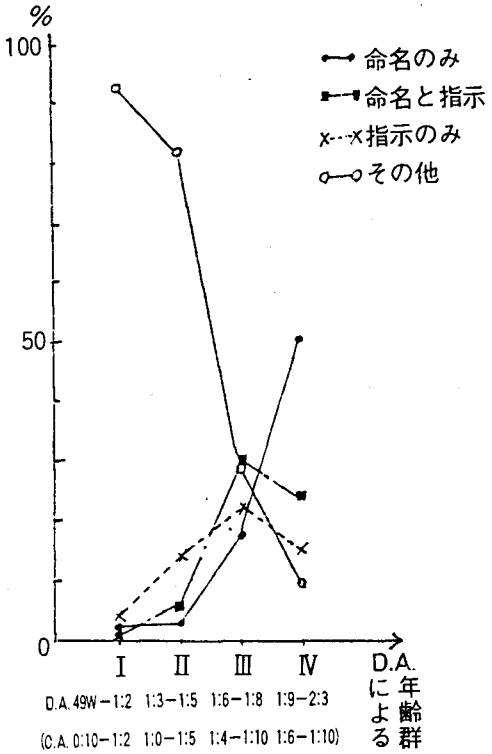


図8　絵カードに対する指さしと命名反応の変化
松原(1979)より

註）年齢群Ⅲでは，指さしに命名発声を伴わす反応が多くなっている。

表3　絵カードで「これ何？」ときかれたときのK児の指さしと発声反応の縦断的変化

松原(1979)より

（□指示有カタカナは発声内容　○命名成功　×命名失敗）

期	試行	C.A	D.A	指示計	命名計	ネコ	車	犬	電車	ゴハン	コップ	靴	帽子	シャツ
年齢群対応期Ⅲ	1	1:3		9	7	○ワンワン	○ブブ	○ワンワン	○ブーブー	○マンマ	○マンマ	☒	○ボー	☒ウウー
	2	1:4	1: 7	9	6	☒ウウ	○ブブ	○ワンワン	○アー	○マンマ	○マンマ	☒	○ボーイ	☒ウウー
	3	1:4		9	7	○ワワン	○ブーブー	○ワンワン	○アー	○マンマ	○マンマ	☒	○ボーイ	☒
	4	1:4		9	6	○ワワン	○ブーブー	○ワンワン	☒ブーブ	○マンマ	○マンマ	○クック	☒ンンー	☒ンンー
年齢群の移行Ⅳ期	5	1:5	1: 8	8	4	○ウウ	○ブーブ	○ワワワ	☒ンンジャ	○マンマ	☒クック	☒マンマ	☒マンマ	☒マンマ
	6	1:5		5	5	○ワウ	○ブーブー	○ワウ	☒バーピ	○マンマ	☒ンンー	○クック	☒	☒ンー
	7	1:5		9	4	☒	○ブーブー	○ワンワン	☒	○マンマ	☒ンンー	○クック	☒アー	☒
	8	1:5		8	6	○ワワー	○ブーブー	○ワンワン	○ブーブー	○マンマ	×	○クック	☒クック	☒
年齢群Ⅳ対応期	9	1:6	1:10	0	5	○ワウ	○ブーブー	○ワワン	×ワワー	○マンマ	×ワワー	○クック	×	×マンマ
	10	1:6		0	6	○アウ	○ブーブー	○ワワワ	×アー	○マンマ	○マンマー	○クック	×マンマ	×
	11	1:6		1	6	○アウ	○ブーブー	○ワワン	☒アウスー	○マンマ	○ニューニュ	○クック	×クック	×アン
	12	1:6		6	5	○アウ	○ブーブー	○ワワン	○ブーブー	○マンマ	☒ワワー	☒	☒	☒
	13	1:6	2: 1	0	5	○ワウ	○ブブ	○ワワワ	×アーワー	○マンマ	×	○クック	×マンマ	×
	14	1:7		0	9	○ニャウ	○ブブー	○ワワワ	○ブーチャ	○マンマ	○マンマ	○クック	○ボーイ	○シャーツ

註）C.A.1:3～1:6の頃に、ネコ、犬に対して、ワンワン、ワウ、という般化がみられる。
また、C.A.1:3～1:5までは指さしと命名の両方を伴う反応が中心である。

が，可能な範囲の発声と指さし行動という手段をもって他者に伝達しようという要求の増大する時期といえよう。大浜らの指摘にみられる指さしと言語の併用という現象と一致していると思われる。また，中島の指摘した「音声の体制化・記号化過程」が進行する時期にも相当していると考えられる。

清水(1978)は，この時期に育児者から，育児語ではなく成人語のみの話しかけを与えられていた乳児に言葉の遅れがみられたことを報告し，子どもの未分化な音声のレベルに合わした育児語による話しかけが大切であると指摘している。このような話しかけによって，乳児と他者（育児者）の間で，第三者を言葉で成立させることが可能となると思われる。

d)11カ月から1歳前半のまとめ

9カ月から11カ月は，他者からの一方向的働きかけの時期に相当すると前述したが，11カ月から1歳前半という時期は，乳児の側からの指さしやみぶり，初語の出現，等にみられるように，他者への交流要求が増大する時期といえよう。それはこの時期の第1段階での共感性の高まりに支えられた交流要求であり，この段階で他者との間の経験を共有し合い共感し合う関係が貧困であった場合には，指さし行動や初語様発声は豊かに表出されにくいと思われる。この点について田中(1978)は次のように指摘している。「活動したことを声を出して確認し相手に訴える，活動したことを相手に確認してもらって共感するという，相手とともに第三者を形成していくいとなみにまで(乳児の活動が)* 高まらないことには，第三者を相手と共有するために相手と結ぶ交通手段(指さしやはなし言葉)* を要請することが不必要となる。[(　)*内は筆者注]」

従って，この1歳前半という時期に，伝達的な指さしや初語様発声が豊かに形成されてくれば，次のはなし言葉の世界まではあと一歩，というところに到達しているといえよう。

3) 1歳半頃のはなし言葉の獲得

1歳半頃に，子どもは急激に全体的に変化を示す。それらの変化のうちの一つに，はなし言葉の獲得という事象は含まれる。変化全体の関連については一まずおくとして，言語面のみの現象をおうと次のようなことがいえる。昨日まで「これ何？」ときかれても言葉で答えられず，「ワンワンどれ？」に対しても正しく指させなかった子どもが，しっかり言葉で答えるのとほぼ同時くらいに正しく指さして答える，という変化をみせる。言葉も動物なら何でも「ワンワン」から「ゾーチャン」「ニャンニャン」と分化しだす(近藤1979)。松原(1979)によると，「これ何？」ときかれて指さしをともなわずに言葉だけで答えるようになるのは，発達年齢で1歳9カ月以降である(図8，表3参照)。これらのことは言葉が物としっかり結びつき確実になってきたことを示している。はなし言葉の世界に入ると，子どもの語彙は急増してゆき，2語文，3語文へと発展してゆくのである。

4) まとめにかえて

以上にのべてきた言語獲得についての仮説的な段階から導かれる点として，各々の段階における働きかけの質を考慮することの重要性があげられよう。言語獲得を促す指導のあり方としては，さまざまな角度からの研究がつみ重ねられており，本論で十分吟味しえているわけではないが，一つの側面からの提起として今後の検討を待つ意味で，働きかけのポイントと思われる点を3点提起したい。

①9カ月頃からの前言語期において，乳児と他者との間に，第三者(物など)を介在させて交流し合う関係を形成すること。

②育児者からの具体的な働きかけとしては，乳児の指さしや行動の一つ一つに共感し，乳児と同じ水準での関わり方に加えて，乳児の行動に区切れ目を与えるような言葉かけ（例えば，乳児がコップにつみ木を入れた時にすかさず「ナイナイしたね」と声をかける，など）を工夫する必要がある。

③乳児と他者との共感関係を基礎にしつつ，指さし行動やみぶり，初語も含めた伝達手段の豊かな形成がなされ，第三者を成立させる手段として乳児と他者の間で展開されてゆくような関係が，1歳前半に十分保障されること。

以上3点については，実践の中で吟味してゆく必要性があることはいうまでもなく，また今後の研究の中で，課題として残されている発達の機能連関の視点からの研究との関連でどうか，検討してゆく必要があろう。その上で再度，言語獲得とは何か，指導の課題，について論稿を重ねてゆきたい。今後の課題としたい。

最後に，筆者の研究に協力していただいた子どもたち，御両親の方々，保育者，多くの方に厚く感謝いたします。

注

1) 3人はすべて女児でその年齢は次の通り。Serena（生後2カ月から），Carlotta（生後6カ月から），Marta（生後12カ月から）。

2) 言語と認知に関する6種の観点のうち第5番目の「言語と認知は共通の源泉から生じる」とするものである。この6種についての整理と評価は村田(1981)に詳しい。
3) このことは指さしが手さしから分化するということを示すものではない。
4) これより以下の月齢と行動の関係はあくまで1つの目安としてかかげているにすぎない。
5) 新版K式発達検査手引(嶋津他1980)によると10カ月から11カ月の乳児でこの反応の通過率が50%である。
6) 例えば，象に対して「象さん象さんお鼻が長いのね」という唄と共に手をブラブラさせるみぶり，がつけられている。

引用文献

Bates, E. 1979 The emergence of symbol: Cognition and commuunication in infancy. Academic Press.

Bates, E., Benigni, L., Bretherton, I., Camaioni, L., & Volterra, L. 1977 From gesture to the first word: On cognitive and social prerequisites. In M. Lewis & L. A. Rosenblum (eds.) Interaction, conversation, and development of language, Wiley.

Bates, E., Camaioni, L., & Volterra, V. 1975 The acquisition of performatives prior to speech. Merril-Palmer Quarterly, 21, 3, 205-226

ベッテルハイム，B. 1973 自閉症，うつろな砦，黒丸正四郎他訳，みすず書房。

Bruner, J. S. 1975 The ontogenesis of speech acts. Journal of Child Language, 2, 1-19

Bruner, J. S. 1976 From communication to language: A psychological perspective. Cognition, 3, 255-287 コミュニケーションから言語へ—その心理学的展望 佐藤三郎編訳 1978 乳幼児の知性 誠信書房

Bruner, J. S. 1976a. On prelinguistic prerequisites of speech. In R. N. Cambell & P. T. Smith (eds.) 1978 Recent advances in the psychology of Language: Language development and mother-child interaction, Plenum Press.

Bruner, J. S. 1977 Early social interaction and language acquisition, In H. R. Schaffer (ed.) Studies in mother-infant interaction. Academic Press.

Bruner, J. S. 1978 Learning how to do things with words, In J. S. Bruner & A. Garton (eds.) Human Growth and Development. Oxford University Press.

Bruner, J. S., & Sherwood, V. 1975 Pekaboo and the learning of role structurs. In J. S. Bruner, A. Jolly, & K. Sylva (eds.) 1976 Play-its role in development and evolution. Basic Books.

Bullowa, M. 1979 Introduction: Prelinguistic communication; a field for scientific research. In M. Bullowa (ed.) Before speech: the beginning of interpersonal communication. Cambridge University Press.

Greenfield, P. & Smith, J. H. 1976 The structure of communication in early language development. Academic Press.

Grieve, R. & Hoogenraad, R. 1979 First words. In P. Fletcher and M. Garman (eds.) Language acquisition, Cambridge University Press.

近藤直子 1979 1歳半という時期は発達にとってどんなフシか。青木民雄・勝尾金弥編著。続・乳幼児の発達と教育。三和書房

コリツォーバ，M. M. 1973 茂木俊彦抄訳 1974 手指の運動発達と言語発達—コリツォーバらの研究—. 精神薄弱児研究，184，70-75

松原巨子 1979 1歳児における指示行動と命名の発達，乳幼児保育研究，6，1-16

松原巨子 1980 乳児における指示行動の成立過程について—三項関係の発達との関連で— 京都大学大学院教育学研究科修士論文

松原巨子 1980a 乳児における指示行動の成立過程について—三項関係との発達的関連— 日本教育心理学会第22回総会発表論文集，40-41

松原巨子　1982　乳児の指示行動の成立過程について(2)―自発の指さしについて―　日本心理学会第46回大会発表論文集，277

松原巨子・瓜生淑子 1982　言語獲得期における象徴行動の発達―指さし行動とジェスチャーの機能の発達的検討―　日本教育心理学会第24回総会発表論文集，274-275

村田孝次　1981　言語発達研究　その歴史と現代の動向　培風館

Murphy, C.M. 1978 Pointing in the context of a shared activity. Child Development, 49, 371-380

Murphy, C.M. & Messer, D.J. 1977 Mothers, infants and pointing: A study of a gesture. In H.R. Schaffer (ed.) Studies in mother-infant interaction. Academic Press.

中島誠　1976　日本語・英語音声の体制化に関する比較研究(10)：言語機能の形成とその情動的感覚運動的基盤　日本心理学会第40回大会発表論文集，776-777

Nelson, K. 1973 Structure and strategy in learning to talk. Society for Research in Child Development Monographs. 38 (1-2)

西村辨作・水野真由美・若林慎一郎　1978　自閉症児の言語獲得についての縦断的研究　児童精神医学とその近接領域，19, 5, 269-289

岡宏子　1968　言語化過程の分析(その13)　日本心理学会第32回大会発表論文集，203

Okamoto, N. 1962 Verbalization process in infancy (1) Psychologia, 5, 32-40

大浜幾久子・辰野俊子・斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子　1981　母子相互作用における指さし行動の発達―時間標本資料の分析―　教育心理学研究，29, 3, 272-278

大井学　1976　利き手の発達と指導についての試論　乳幼児保育研究，4, 65-79

Ratner, N. & Bruner, J.S. 1978 Games, social exchange and the acquisition of language. Journal of Child Language, 5, 391-401

嶋津峯真・生沢雅夫・中瀬惇　1980　新版K式発達検査実施手引書　京都国際社会福祉センター

清水民子　1978　乳幼児の発達と保育　青木書店

園原太郎　1961　行動の個体発達における連続性の問題　哲学研究，41, 4, 251-268

Spitz, R.A. 1965　母子関係の成り立ち　古賀行義訳　同文書院

田中昌人　1967　1, 2歳児の発達的特徴：1歳児―1次元可逆操作とことばの獲得―1, 2歳児のための保育の手引　滋賀県

田中昌人・田中杉恵　1968　『精神薄弱児』研究の方法論的検討　心身障害者福祉問題総合研究所

田中杉恵　1978　発達における階層間の移行の診断についての覚えがき―連結可逆操作獲得の階層から次元可逆操作獲得の階層への発達について　障害者問題研究，14, 3-12

Trevarthen, C. 1977 Descriptive analysis of infant communicative behaviour. In H.R. Schaffer (ed.) Studies in mother-infant interaction. Academic Press.

Trevarthen, C. 1979 Communication and cooperation in early infancy: A description of primary intersubjectivity. In M. Bullowa (ed.) Before speech: The beginning of interpersonal communication. Cambridge University Press.

Trevarthen, C. & Hubley, P. 1978 Secondary intersubjectivity: Confidence, confiding and acts of meaning in the first year, In A, Lock (ed.) Action, gesture and symbol: The emergence of language. Academic Press.

（本研究科博士後期課程）